城主「三潴出羽守政長」秘話

中世、関川村上関に「上関城」があった。城主は三潴氏。豊臣秀吉によって上杉景勝が会津に移封させられるまでのおよそ400年間、上関城に在城したと言われている。激動の時代にあって、400年という長きにわたって変ることなく上関城の主として勤め通した三潴氏とは、いったいどのような武将であったのか、地域の歴史研究家、渡辺伸栄さんに執筆いただいた。

渡辺伸栄 氏

筆者プロフィール
元職・村上小学校長、村上市教育長、新潟大学特任教授
現在・新潟医療看護専門学校村上校非常勤講師、関川村歴史文化財調査委員、関川村広報誌に「古文書でタイムスリップ・江戸時代わが村の暮らし」連載中

関川村上関の荒川に架かる温泉橋のたもと、うっそうとした杉林の中に、戦国時代の古城址が眠っています。草むす林内に残る空堀や土塁の跡は明瞭で、小規模ながら本丸・二の丸・三の丸・桝形（出入り口の囲み）など、しっかりとした縄張り（設計のこと）の城であることが分かります。ここが、荒川城とも呼ばれた「上関城」。城の主は三潴出羽守政長。栄光と挫折の果てに、老いてなお一瞬の輝きを求めた武将。知られざる城の知られざる城主の物語です。

一　上杉謙信の指令

「色部家中の動揺をしずめよ。」三潴出羽守政長が受け取った上杉謙信からの指令です。何があったのでしょうか。

永禄十二年（一五六九年）のこと。謙信は、自分に敵対した本庄繁長の城（村上）を大軍で攻めていました。一月九日夜更け、大激戦中に、謙信軍の大将の一人、平林城主色部勝長が急死してしまいます。戦死と書いてある歴史書もあります。死因はどうあれ、合戦中の主君の急死です。色部家中（色部家とその家臣たち）の動揺は計り知れません。その後の謙信軍の戦いに影響する心配もあります。

それで、謙信は、「色部家は勝長の子弥三郎を跡継ぎにするから、家中の者によく言い聞かせて安心させるように」と、出羽守政長に命じ、突然色部家を継ぐことになった年少の弥三郎顕長を後見させたのです。（政長宛謙信書状「歴代古案」）

▶三潴氏傍系三潴佐左衛門の甲冑（関川歴史館所蔵）

二　三潴出羽守政長とは

出羽守政長に宛てた謙信の指令書は、色部家の後見を命じた後に、長い続きがありました。

越後国内の状況や武田信玄の動きを知らせ、「本庄繁長の城はすぐに落ちるから、大川三郎次郎に、藤掛城（山北地区大川谷）の攻撃を急がせよ。そなたの働きが肝心だ」と、書かれています。

本庄繁長の反乱は、武田信玄と示し合わせた反謙信の動きです。大川三郎次郎は謙信派ですが、弟二人が繁長派で城に立てこもっていました（渡辺三省「本庄氏と色部氏」）。謙信は、出羽守政長に内外の動向を伝えた上で、ここはもたもたしている場合ではないぞと、戦いの指令を出していたのです。

出羽守政長の「政」の字は、謙信の元の名前、政虎の一字を与えられたもの。それだけ謙信の信頼厚い家臣でした。本庄城攻撃のこの合戦では、謙信直属の軍目付（監察役）を務めていたのです

三　上関城と三潴氏

上関城主三潴氏の始まりは、鎌倉幕府が、古代から上関の地にあった「桂関」の関所役人に、三潴左衛門尉を任命したことによるとされています（「関川村史」）。

三潴は九州の地名で、三潴氏はそこの豪族でした。NHKの大河ドラマで人気を上げた和田義盛は一時期、三潴荘の地頭でした。関川村を含む奥山荘は、義盛の弟義茂が地頭です。三潴左衛門尉が桂関に来ることになったのは、和田兄弟のつながりが縁ではないかとの説があります（横山貞祐「上関城跡発掘調査報告書」）。

ドラマでご存じの和田合戦で一族全滅の和田氏の中、奥山荘地頭の和田氏は生き残り、黒川氏、中条氏となって活躍します。

三潴氏が、確かな史料に登場するのは南北朝時代の一三四四年。黒川氏の所領争いに、調査介入した記録が残っています（「新潟県史資料編」）。以来、上関城主三潴氏は、越後守護の家臣として下越後で活躍の跡を残し、出羽守政長の父掃部介利宣の代から、上杉謙信の家臣になっていました。

四　上関城は奥羽への関門　あの義経も通行か？

上関の地は、奥羽に通じる国境で、古来、荒川通りと呼ばれ水陸の重要地点でした。江戸時代にも川と陸の番所（関所のこと）が置かれ、米沢街道の宿場として栄えた土地です。

中世の上関城は、古代の「桂関」以来、国境警備の重要な場所。その地に、なぜ、鎌倉幕府は九州出身の三潴氏を配置したのでしょうか。

ここからは、筆者の妄想です。源義経をひそかに奥州平泉まで逃がすためだったのではないか。各地に残る義経逃亡伝説は、鎌倉幕府の密偵（スパイ）でもあった傀儡子（旅の人形使い芸人）たちが、義経逃亡ルートに煙幕を張るため、言いふらして歩いた。

源　頼朝は、藤原氏の治める奥州を手に入れるため、義経をあえて逃がした。そのルートとしては、奥羽内陸の奥深くに通じる上関の地は最適。そこへ、義経の顔を知っている三潴左衛門尉を九州からわざわざ呼び寄せた。

確証も傍証もなく、しょせん、空想の域を出ない話ではありますが。

五　国境警備の三潴父子

それはさておき。ことほどさように、羽越国境の警備は重要だったということです。

上杉謙信は、本庄繁長を攻めるにあたり、事前に、隣国米沢の伊達氏や庄内の大宝寺氏の動きを警戒して国境の警備強化を命じます。永禄十一年（一五六八年）、出羽守政長の子左近助長能を庄厳城の守備に着けました。庄厳城は、村上市朝日地区笹平にありました（横山貞祐「上関城跡発掘調査報告書」）。村上の地から米沢や庄内へ通じる重要地点です。三潴父子は、上関城と庄厳城で、国境の警備を受け持っていたのです。

左近助は、繁長降伏の後も庄厳城から離れず、結局十二年もの長い間、この城で国境警備の任に当たっていました。

その父出羽守政長は、上関城主として国境警備に当たるほか、下越後一帯を取り締まる役人でもありました。しかし、政長の活躍はそれにとどまらず、もっと広範囲にわたっていたのです。

六　謙信の命で、将軍義輝のもとへ

本庄城攻撃戦の八年前、永禄四年（一五六一年）の暮れのことです。出羽守政長は、謙信の命で、室町幕府将軍足利義輝のもとへ使者として上洛（京へ上ること）しています。（「謙信公御書集」）。

これには、いきさつがありました。

それより二年前の永禄二年のこと。謙信は五千の軍勢で上洛、将軍義輝に拝謁（位の高い人に会うこと）しました。義輝は謙信の人物力量を見込み、大いに頼りにするようになります。

永禄三年、謙信は、上杉憲政から関東管領の職と上杉家を譲られます。将軍義輝は、謙信を再度上洛させ、正式に関東管領の任命を行いたいと心待ちにしていました。

永禄四年十一月、義輝は、謙

2023新春特大号特集〈関川村第２弾〉

上杉謙信の股肱之臣 上関

頼りになる忠実な家臣を「股肱之臣」という

栄光と挫折の

信のもとへ使者を送り、上洛を促します。しかし、謙信は前年の越中（富山）進攻に続き、川中島大合戦、そして度々の関東出兵と東奔西走、八面六臂の超多忙。とても上洛の余裕なく、出羽守政長を使者にして、事情説明方々関東管領任命の御礼に参上させたというわけです。

年明けて永禄五年一月、無事使命を果たした出羽守政長は、将軍義輝から肥前国吉の名刀を拝領（位の高い人からものをいただくこと）して帰国しています。政長は、謙信の外交官としても大活躍していたのです。

七　御館の乱～出羽守政長の挫折～

天正六年（一五七八年）三月、上杉謙信、突然の病死。直後、謙信の二人の養子、景勝と景虎の間で跡目争い「御館の乱」が起こります。

出羽守政長は、景虎につきました。しかし、景虎は敗戦。景勝の勝利です。敵方についた政長は、景勝に、領地を取り上げられてしまいます。それらは、景勝についた武将に配分されました。

最も早い記録では、御館の乱の年九月に、安田氏に分け与えられています（「新潟県史資料編」）。その後も、天正十年（一五八二年）の新発田重家との戦いで功績のあった色部氏や小田切氏にも与えられた記録が残っています。（「歴代古案」）

三潴氏は、謙信の時代よりずっと前から、居城のある上関の地を本拠としながらも、広く下越後一帯を担当する役人として活躍してきました。そして、政長の父掃部介利宣は、謙信軍の大将として川中島の合戦に従軍し、武田軍千三百人を打ち負かす大手柄を立てています（「歴代古案」）。

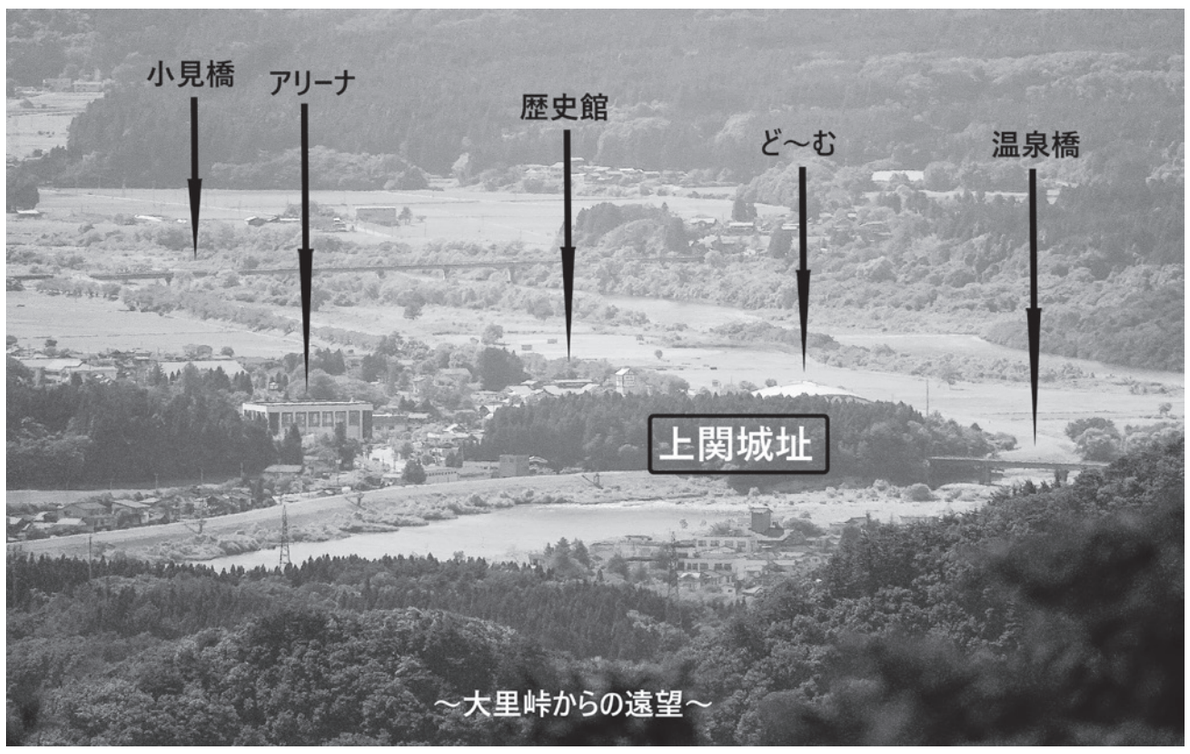
そのような先祖代々の実績の上に立っての出羽守政長の活躍です。その領地は、広く下越後各地にありました。それがすべて、景勝に取り上げられてしまったのです。

八　左近助長能の上関城復帰

御館の乱の後、出羽守政長の子左近助長能は、十二年間在城した庄厳城守備の任を解かれ、浪人となります。父が景勝に敵対したため、父子ともども上杉家臣から除かれてしまったのです。

しかし、天正十一年（一五八三年）、本庄繁長の口添えによって、左近助は景勝に許され、上関城に戻ることができました。この頃の左近助の領地は、百八十三石余と記録されています。父政長が持っていた各地の領地は、これよりもっと多かったはずです。そのほとんどが、戻らなかったということでしょう（横山貞祐「上関城跡発掘調査報告書」）。

それはさておき、左近助の復帰に、本庄繁長の口添えがあったということは、永禄十二年の本庄城攻撃で繁長が謙信に降伏した際、軍目付だった出羽守政長の繁長に対する配慮が行き届いていたからこそのことと、筆者は推測しています。



上関城址遠望

九　出羽守政長の戦死

新発田市（旧豊浦町）の下中ノ目地区の広大な水田地帯の中に、ポツンと小山が残っています。能化山というそうです。寄って見ると、立派な石碑が立っています。

読むと、水間出羽守則長という人物がこの地に住み、天正十四年（一五八六年）、上杉景勝が新発田重家を攻撃したときの戦いで、家臣の細野兼則とともに戦死、二人の遺骸をこの能化山に葬ったとあります。

三潴出羽守政長の領地に「中目村」があったことは、確かです。そこが、色部氏に与えられた記録が残っています（神林村教育委員会「色部氏史料集」）。また、「三潴」は、たびたび「水間」とも書かれます。このことからして、政長は則長と名を変え、旧臣の兼則とともに、この地にひっそりと住んでいたのに違いありません。

そして、景勝の新発田攻めに加わったのでしょう。旧豊浦町教育委員会設置の説明板には、則長と兼則は新発田方に「興し」（くみし）とありますが、石碑に「興」の字は無く、「芝田治長（新発田重家のこと）之敵上杉景勝水間則長党」と書いてあります。景勝と則長は「党」、つまり仲間と読めます。

この三年前に、左近助長能は許され上関城に復帰しています。水間出羽守則長すなわち三潴出羽守政長は、子左近助の復帰を応援し三潴家の名誉を挽回したかったのではないでしょうか。

老兵死して塚を残す。今は昔の物語です。

能化山に建つ「細野世紀碑」

新発田市下中ノ目の能化山

「三潴」の読み方・・・三潴氏の出身地とされる九州の三潴地方（久留米市三潴町）は「みづま」又は「みずま」です。三潴氏は発音が同じことから水間氏とも書かれます。ただし、上関城主三潴氏を先祖にもつ現在の三潴家では「みつま」と名乗っています。本稿が対象にした時代には、よく「水間」の文字も使われることから、「みづま」と発音していたのではないかと思われます。

あとがき

「お城山」と呼び親しんだ上関城址。子どもの頃、この山に陣地を構えて戦ごっこなどをした遠い思い出。本丸裏の崖道を下ると獅子舞岩と呼んでいた岩盤の上に出、その先は深い淵。子どもたちの絶好の川泳ぎ場でした。

現在のお城山はうっそうとした杉林で、山のへりを通る県道のそばに「上関城址」と書かれた石碑が立つだけのさみしいところになっています。

林内に静かに眠る城跡、埋れゆく歴史。定年退職して時間ができて、この城の歴史をまとめておきたいと調べ始めました。二〇一三年には一応のまとめがついて、ネット上に「上関城四百年物語～城主三潴氏の研究～」と題してアップすることができました。

その甲斐もあってか、様々な方から情報提供があり、そのつど新しい事実が判明して、HPを書き加えています。https://watanobu.com/kamisekizyo.html

ぜひお読みいただければと思います。